

## 金曜日のバイブルスタディーについて

マラナサ・グレース・フェロシップ 菊地一徳氏

午後の学びの原点は一人の人から始まりました。T姉がK牧師に「聖書を学びたいので、バイブルスタディーをやして下さい。」と申し出がありました。もう10年以上も前のことです。ただT姉と1対1で行うのは、問題があったのでK姉も加わり、3人で学びが始まりました。それからさらに2人の姉妹が加わりレギュラーメンバーが形成され、さらに個人の学びから、公同の学びに移行して行って現在に至っています。当時はローマ書を学んでいました。ローマ10章17節は皆さんご存知の通り、

そのように信仰は聞くことから始まり、聞くことは、キリストについてのみことばによるのです。

ローマ書も金曜日の学びの原点となるテキストでした。このみことばによってT姉もK姉もN姉もS姉も養われて、主の取り扱いを受けて、成長して、変えられてきたと思います。当時は録音してなくて、次第にテープ、MD、現在ではICレコーダーによってCDに焼くようになって来ました。小グループであるにも関わらず、午後の時間であり眠くなることもありました。眠気防止のために、それぞれに聖書の箇所を読んでもらうことを最初はしていました。また当時は、今のように長くはできず、30分位しかもたなかったと思います。しかし、そのような中から大きく劇的に変えられてきたと思います。

今から聖書の箇所を沢山開きたいと思います。バイブルスタディー、聖書を学ぶことの原点、聖書を学ぶ上での所信、姿勢、目標、目的、このような基礎的な事をもう一度、1から思い直していただいて、そして、改めて今の自分たちの学ぶ姿勢は健全であるかどうか、正しいものかどうか、確認をしていただきたいと思います。もし正しくなければ、この機会に正していただければ幸いです。

まず、開いていただきたい箇所はⅡテモテ3:14~17

『<sup>14</sup>けれどもあなたは、学んで確信したところにとどまっていなさい。あなたは自分が、どの人たちからそれを学んだかを知っており、<sup>15</sup>また、幼いころから聖書に親しんで来たことを知っているからです。聖書はあなたに知恵を与えてキリスト・イエスに対する信仰による救いを受けさせることができます。<sup>16</sup>聖書はすべて、神の靈感によるもので、教えと戒めと矯正と義の訓練とのために有益です。<sup>17</sup>それは、神の人が、すべての良い働きのためにふさわしい十分に整えられた者となるためです。』

学んで確信したところにとどまっていなさい。重要な言葉です。学んで確信したところから外れてはいけません。とどまる。続けていくということです。そこから反れない、外れない、しっかりと御言葉を土台として立ち続けるということです。

幼い頃からテモテは聖書に親しんできたとパウロは言っています。実際に母、祖母から聖書の学びをして幼い頃からパウロとも親交があって、彼は聖書に触れてきました。ここにいる皆さんは、必ずしもクリスチャンホームの出身でないかもしれませんが、幼い頃から聖書に親しんできた者ではないかもしれませんが、ここでいう幼い頃とは、ただ年齢的な意味だけではなく、皆さんには霊的な意味でも捉えていただきたいと思います。すなわちクリスチャンになって間もない頃、ベビークリスチャンの頃から霊的に未熟で幼い頃から聖書に親しんで来れた、もしかしたら30代、40代、50代とか大分大人になってから

イエスキリストを知って、救われて、聖書を読み始めた人もあると思いますが、何歳からであろうと幼い頃から（救われて間もない頃から）聖書に親しんでこれるということは素晴らしい恵みであり、祝福であると思います。

皆さんもご存知の通り折角クリスチャンになっても誰もが救われた当初から聖書に親しむということができないではありません。あつてはならないことだとは思いますが、すぐ救われたら、先ず教会員となって教会の奉仕、当番、係がまわって来て、それぞれいろいろな奉仕をしなければいけない。または、すぐに十一献金の要請がきて、月定献金だとか特別献金だとか封筒に名前を書いて要求された額をそこに投入して献金箱に投げ入れる。もう救われて教会員になったら、すぐにそのような義務が生じて、御言葉を学ぶよりも先に、奉仕とか捧げ物（献金）とかそうしたものから強要されるという語弊があるかもしれませんが、当然の事として半ば強制的に押し付けられるようにしてそれをさせられるわけです。そうでなければ教会員としては認められないというような教会が残念ながら多く有ります。

でも、皆さんはこの教会を通して救われたのであれば幼い頃から（まだ救われて間もない頃から）聖書に慣れ親しむということ許されています。何もしなくても、当番制などありません。奉仕をなささいとも言われません。献金しなさいとも強要されません。もちろん聖書に書かれている通り私たちは主のしもべですから主にお仕えするべきものであります。でもその主を知らなければ、個人的に主との交わりがなければ、私たちは自発的に喜びをもって感謝に溢れておつかえすることはできないのです。よく知らない方のことは信頼もできませんし、愛することもできないわけです。

でも、聖書というものはまさに神に関するすべての知識、情報を提供し、そして神との親しい交わりをもたらすことのできるいのちの言葉です。これによって私たちは神のことを深く知り、そしてこれによって私たちはいのちの言葉そのものであるイエス・キリストの似姿に変えられていくのです。ですから聖書を学ぶことによってますます神を深く知って、神との関係が親しく近づけられて、そしてもっとこの方を知りたい、そしてその方の愛を受けるならばもっとこの方の愛に伝えていきたい、たくさんの恵みを受けてその恵みに応答していきたい、それが自発的な奉仕、捧げ物（献金）といったことにつながっていくのです。それも無いままにいきなり教会員になったから次週から受付をやって下さいとか、掃除を担当してくださいとか、食事の当番をしてくださいとか、まるで自治会のようにその地域に住み始めたらいきなり当番が回ってくる。みんなやっていることだから迷惑をかけてはいけない、献金も教会の維持費として必要である、クラブの会員であるかのようにみんな当然のように支払っているから。でもそのようなことでは、いつか疲弊してしまうわけです。何のために教会に集っているかも分からなくなってしまう。クリスチャンだから当然だと言われるだけで、そう感じるだけで、それ以上の意味を見出せずに、だんだんクリスチャン生活がドライになってくるわけです。エキサイティングでないわけです。喜びに溢れているわけでもないのです。重荷になってくるだけです。

ですから、もう一度原点に立ち返ってもらって、あなたは幼い頃から救われた当初から聖書に親しんできたことを知っているからですと。

**聖書はあなたに知恵を与えてキリスト・イエスに対する信仰による救いを受けさせることができるのです。素晴らしい約束です。聖書は私たちに知恵を与える。**

どうしたらいいかわかりません。判断に迷います。理解に苦しみます。そういう時、聖書は知恵をあなたに与えます。そして常にキリスト・イエスに対する信仰による救いを受けさせることができるのです。この救いは、もちろん地獄からの救いも含めてありますが、既に救われている者に対して、（これは牧師のテモテに対してパウロが最後に絶筆として語っていること、遺言として語っていることですから、）あなたにと個人的に語っています。テモテに対して、一般的な話をしているわけではありません。牧師のテモテに、聖書はあなたに知恵を与えるんだと。

そして聖書はキリスト・イエスに対する信仰による救いを、過去もそうであったように今もこれから先も与え続けるという約束をしているわけです。いろいろな状況から、いろいろな状態からあなたは救われていく。そのために聖書がその力を発揮するのであります。

そして 16 節に

『聖書はすべて、神の靈感によるものである。』

神のいぶきによるというものがその直訳です。いのちの息が吹き込まれているのが神の言葉である聖書であります。ただの印刷物ではないのです。ただの宗教書、道徳の教科書、古代の文書ではないのです。これは、今も生きています。死んでいたらもう息はありません。生きていますから息が吹き込まれて息づいているわけです。

『教えと戒めと矯正と義の訓練とのために有益です。』

そして、「教えと」何が正しいのか教えてください。

「戒めと」何が間違っているのか示してください。

「矯正と」間違っている状態から正されるということです。

「義の訓練」一度間違いを正すだけでなく、これからも継続的に持続しながら正しい道を歩むことができるように。

全部これは、聖書がもたらす益です。

私たちは何が正しいことなのか、自分では分からない者です。でも聖書は正しいことを教えてください。

私たちは何が間違っているのか、分からない者です。でも聖書はその間違いを示してください。

私たちは間違いが分かってもそれをどのように正したらいいのかわからない者ですが、聖書は私たちに矯正してくれるわけです。曲がったものを真っ直ぐに正してくれるわけです。

でも、私たちは弱いものですから、一度正されても矯正を受けても、それを継続するということができないと思ってしまう弱いものです。でも聖書は「義の訓練」を私たちに備えます。継続して私たちは正しい神の道を歩み続けることができる、正しくありつづけることができるように、この聖書が私たちにサポートしてくれるのです。これは私たちにとって最高の益をもたらしてくれるものです。

そして 17 節に

『それは、神の人が、すべての良い働きのためにふさわしい十分に整えられた者となるためです。』

「神の人」テモテのことを一義的に表していますが、聖書に慣れ親しんで聖書を自分の個人の最大の益として受け取っている者は、全員「神の人」になれるわけです。

神の人が、すべての良い働きのためにふさわしい十分に整えられた者となるためです。

今まで読んできた節の中で「ため」という言葉が目的・目標として書かれていました。

聖書は教えと戒めと矯正と義の訓練のために有益です。

そして聖書は神の人がすべての良い働きのために

そしてふさわしい十分に整えられた者となるためにある言葉です。

ですから、ここでバイブルスタディーの目的とか目標についてももう一度考えて頂きたいと思います。私たちはただ単にここで聖書知識を蓄積するために学んでいるのではないということです。

確かにこれは有益ですが、それも実際生活に活かされていかなければ無意味・無価値だということです。すべての良い働きのために、良い働きのために私たちは学んでいるということです。ふさわしい十分に整えられた者となるために、この聖書は欠かせないということです。この「ため」というところに目的・目標を見出して頂きたいと思います。Ⅱテモテ 2:15 を参照してください。

『あなたは熟練した者、すなわち、真理のみことばをまっすぐに説き明かす、恥じることのない働き人として、自分を神にささげるよう、努め励みなさい。』(Ⅱテモテ 2:15)

これも聖書を学ぶ上で鍵となる重要聖句ですが、私たちは成熟を目指して聖書に取り組んでいます。最初はベイベークリスチャンでした。でも幼い頃から霊的に、幼い頃から聖書に慣れ親しんで、だんだん成熟に至っていくわけです。そして成熟に至っていくならば、

真理のみことばをまっすぐに説き明かす者

恥じることのない働き人

となれるわけです。それが神の人のことです。

そのために、自分を神にささげるよう、努め励みなさい。最大限の犠牲を払いなさい。一言でいえば、あなたは御言葉を学ぶためにあなたは献身しなさい、と言っています。これは、いわゆる神学校に行くような献身のことをいっているではありません。すべてのクリスチャンに対してこの言葉は述べられています。ここにいる皆さん全員に対して、あなたは御言葉を学ぶことに献身しなさい、専念しなさい、このために自らをささげなさい、犠牲的に、忙しくても御言葉を学ぶためには時間を作りなさい、といっているわけです。順境の時だけでなく、逆境の時でも、聖書を開くように、学ぶように、他の楽しみや他の趣味や遊びや快楽、娯楽、そうしたものを置いておいて、聖書を学ぶことに専心しなさいと。それがここで言われている「勧め」ではなくて、「命令」です。努め励みなさいと、これを怠っているならば、命令違反を犯しているということです。でも、この金曜日午後のスタディーグループは、皆この命令に従って今まで主と共に歩んで来られたと思います。

今度はヘブル 5:12~14 を開いてください。

『<sup>12</sup>あなたがたは年数からすれば教師になっていなければならないにもかかわらず、神のことばの初歩をもう一度だれかに教えてもらう必要があるのです。あなたがたは堅い食物ではなく、乳を必要とするようになっています。<sup>13</sup>まだ乳ばかり飲んでいるような者はみな、義の教えに通じてはいません。幼子なのです。<sup>14</sup>しかし、堅い食物はおとなの物であって、経験によって良い物と悪い物とを見分ける感覚を訓練された人たちの物です。』(ヘブル 5:12~14)

そして、6章に続いていきます。

年数からすれば教師になっていなければならないと、ヘブル人への手紙の記者は(おそらくパウロと思われるが)、そう言っています。ユダヤ人の教師はだいたい40歳以降ということになっていますが、ただ年数というのは勿論、御言葉を学んできた期間を指すわけです。自動的に40歳になったら教師になるわけではありません。例えばキリストの弟子たちであるならばイエスと共に3年半寝食を共にしながら、イエスから直接みことばを学び、バイブルスタディーを受けてきたわけです。キリストの弟子であるならばもう3年半で教師になれるわけです。勿論これは、マニュアルみたいな物はありません。そういう3年半と

いう期間も聖書で定められているわけではありませんが、一つの目安として考えて頂ければと思います。そして、この学びは10年は経過しているということを皆さんにお伝えしておきたいと思います。10年あれば、もう十分ではないかと思えます。3年半というのは勿論毎日イエスと共に歩んだ弟子たちのことをいっているわけですが、バイブルスタディーだけが学びではなかったはずで、1週間に1回だけの学びではありませんでしたが、でも他の日もイエスと共に歩んできたはずで、ちなみにこの学びの最年少者は、Hちゃんです。去年の段階（小学生の時）から、もう学びに参加しています。今は中学1年生ですが、10年後を考えてみてください。Hちゃんがあと10年経ったら何歳になっているか。22歳です。10年というのは短いようで大きいということです。12歳の子が22歳になる。22歳になったら何ができるでしょうか。12歳の子にはそんなにたくさんすることはできないかもしれませんが、22歳の女性には何ができるでしょうか。10年間聖書を学び、主と共に歩み、是非このことも皆さん一人一人に考えて頂きたいと思えます。いつまでも現状維持ではいけないということです。後ろ向きでもいけません。このままで良いと妥協してもいけません。自己満足してもいけないということです。私たちは努め励むということが問われています。勿論、箴言19:2の御言葉を皆さん知っているように

**熱心だけで知識のないのはよくない。急ぎ足の者はつまづく。**

じっくりと聖書知識を蓄えていく必要があります。だからと言って、頭でっかちになってもいけないということです。Iコリント8:1には

**次に、偶像にささげた肉についてですが、私たちはみな知識を持っているということなら、わかっています。しかし、知識は人を高ぶらせ、愛は人の徳を建てます。（Iコリント8:1）**

この二つの御言葉をバランスをもって捉えて頂きたいと思えます。

熱心だけでもいけません。知識だけでもいけません。その両方が必要です。

聖書知識がなければ、熱心さで突き進んで、つまづいてしまいます。急ぎ足の者はつまづくことがあります。しっかりと御言葉によって吟味して、このことは聖書的かどうか、しっかりと識別して、確認をとって、確信に至った時に、私たちは初めて神の御心を実行することができます。ですから、熱心だけで知識がないのはつまづく危険性がありますので、気を付けて頂きたいと思えます。

その一方で知識ばかりをため込んで、頭でっかちになって、私は何でも知っているし、MGFで10年も御言葉を学んできた、他の人よりも十分に聖書の学びの時間を費やしてきたと。でも、知識は人を高ぶらせるのです。私たちはあの人とは違う、あのグループとは違う、あの教会とは違う、あの聖書をろくに知らない人たちとは違う、そんな高ぶりに気を付けて頂きたいと思えます。

**愛は人の徳を建てます。Iコリント13章、愛の書を皆さんご存知とは思いますが、クリスチャンの原点です。そこに、こう書いてあります。Iコリント13:1~3**

『<sup>1</sup>たとい、私が人の異言や、御使いの異言で話しても、愛がないなら、やかましいどらや、うるさいシンバルと同じです。<sup>2</sup>また、たとい私が預言の賜物を持っており、またあらゆる奥義とあらゆる知識とに通じ、また、山を動かすほどの完全な信仰を持っていても、愛がないなら、何の値うちもありません。<sup>3</sup>また、たとい私が持っている物の全部を貧しい人たちに分け与え、また私のからだを焼かれるために渡しても、愛がなければ、何の役にも立ちません。』(Iコリント13:1~3)

聖書知識に精通していても、聖書66巻を学び終えたとしても、御言葉をたくさん暗誦していたとしても、金曜日の午後のスタディーグループに属していたとしても、愛がなければ何の値打もありません。愛がなければ何の役にも立たないということです。知識は単に人を高ぶらせるだけです。常にこのバイブルスタディーにおいて頭でっかちにならないように気を付けて頂きたいと思います。

この知識を愛をもって実践して、知恵に変換して頂きたいと思います。知識と知恵は、別物です。知恵は知識の適用です。アプリケーションです。適用しなければ、言い方を変えれば、愛によってこの知識を生きたものにしなければ、役に立たないということになります。いくら知識があっても、これを愛によって実行に移さなければ、何の値打もないということです。今までの聖書の知識、それは膨大に皆さんの頭の中にも蓄積されていると思いますし、また、皆さんの手元の聖書にも沢山のアンダーラインとか、しるしとか、メモ書きとか、いっぱい書き込みがあると思います。また皆さんが取っているノート、それも沢山たまってきていると思います。それを是非振り返って頂きたいと思います。読み返して頂きたいと思います。そのうえで自分は、あの時よりも成長しているかどうか、キリストの似姿に変えられているかどうか、確認していただきたいと思います。皆さんのバイブルスタディーのノートも今と比べてどうなのか、そのこともこの機会を通して振り返って頂きたいと思います。

そして次に、D・L ムーディーのことばを紹介したいと思います。19世紀、アメリカを代表する大衆伝道者です。彼はこう言っています。

**「聖書は私たちの知識を増やすためのものではなく、私たちの生涯を変えるためのものである。」**

それが、聖書というものです。生涯が変わっているかどうか、日々の生活がこの御言葉の学びによって変わっているかどうか。「おまえはあんなに足しげく教会に通って聖書を学んでいるのに全然変わらないじゃないか。」と、未信者の家族から言われたことはないでしょうか。ショッキングな言葉ですが、割合に的を得ていることばだと思います。勿論クリスチャンの夫にもそのように言われることもあると思います。彼らは昼間、外で一生懸命仕事をしているわけです。主婦の皆さんの多くは、彼らからすれば比較的自由な時間があって午後のこの学びにも集うことができるわけです。残念ながら夫は、あまり聖書を学ぶ機会がないわけです。その分妻のあなたが教会でたくさんの学びをすることができます。そのあなたが、これだけ学んでいるのに、変わっていなければ、クリスチャンの夫でも失望するわけです。学ぶ時間のために、もしかしたら家事がおろそかになるかもしれません。家のこともやらないで、教会に入りびたりになって、聖書ばかり読んで学んで、何の意味があるのか。また同じような失敗・過ちをして、全然成長していないじゃないか、とそのように指摘されて、痛いところを突かれることがあろうかと思えます。でも、そのことを厳粛に受け止めて頂きたいと思います。決して高ぶってははいけません。聖書を知らないくせに、夫に対してそれを口に出さないにしても内心、ろくに聖書を読んでいないのに、何を偉そうなことを、私だって一生懸命やってるの、御言葉を学ぶことも大切だとクリスチャンなら理解できるでしょう、なのにあなたは、私は霊的であなたは肉的で。等々口に出さないにしても内心そのように思って苦々しく夫の言うことを聞いている、腹を立てながら、ムカつきながらですね。もしそのようなことが今でも続いているならば、これを機会に夫にそのように言われないように、あるいは家族・子供たちや親にそのように言われないように注意していただきたいと思います。

聖書は私たちの知識を増やすためのものではなく、私たちの生涯をかえるものだと、このことを私たちは証ししなければなりません。聖書の素晴らしさ、凄さを証ししなければいけないのです。そのために学んでいるという認識を持っていただきたいと思います。そうでなければ、いつまでたってもノンクリスチャンのあなたの伴侶なり家族は、聖書に魅力も感じません、教会にも魅力を感じません。教会に行っ

て変わらないじゃないか、意味がない、かえって教会に時間を取られて他のことがおろそかになっている、もっと家の掃除をしてもらいたい、片付けしてもらいたい、もっとちゃんとしたものを作ってもらいたい、自分にもっと尽くしてもらいたい、そんなことで一生終わってしまいます。そういう夫から逃げたいがために教会に現実逃避を求めてくる。そのような学びでは価値がありません。知識は人を高ぶらせるだけです。しかし一方で愛は人を建てあげるわけです。人の徳を建てるわけです。もっと家族を愛するようになるのです。もっと職場の人を、上司を部下を、愛せるようになるのです。もっと近所の人を愛せるようになるのです。御言葉を学べば学ぶほど。あなたをキリストの似姿に変えるのが、この聖書の学びです。そうっていないならば、そこには愛がないのです。愛がない学びは、意味がないということです。また今度は 20 世紀を代表する世界的な福音派のリーダー、英国国教会の司祭でもあったジョン・ストットという人の言葉を紹介したいと思います。

**「私たちは自分自身を聖書に立ち向かわせて、自分の安全を妨げさせ、自分の満足を捨てさせ、そして自分の考えと行動パターンをひっくり返さなければなりません。」**

聖書の学びは、必ずしも耳障りのいいものではないということです。私たちの安全を妨げさせるもの、コンフォートゾーンを脅かすものです。これでいい、これでよしとする、自分のなかの安全なゾーン、自分だけのテリトリー、自分が好きに楽しくできる、その領域を聖書は脅かします。自分の考えと行動パターンをひっくり返すことを聖書は要求するわけです。今までの自分の価値観とか自分の主義・主張、自分の哲学、自分のやり方、それを聖書は脅かす、脅威となるということです。

その脅威を嫌う人たちは、バイブルスタディーに来なくなります。聖書も読まなくなります。なぜならば、自分自身を保って行きたいからです。自分の安全なゾーンを確保していききたいからです。自分の好きなことをやり続けたい、自分を変えたくない、そういう人はバイブルスタディーに来なくなります。聖書にもそれほど興味を持たなくなります。熱心でなくなるわけです。学べば学ぶほど自分の世界を守ることが至難の業となってくるわけです。自分の世界を破壊しなければいけない、自分が殻から一歩外へでなければいけない、その殻を破らなくてははいけない、自己満足の世界から脱出しなければいけない、そのことを聖書は迫ってくるのです。問いかけて、促してくるわけです。その差し迫りがあまりのプレッシャーでとても耐えきれない、耳が痛い、自分の世界を守ること必死な人たちは抵抗し続けますが、それもできなくなったら、ここに来ることが苦痛になってくるわけです。聖書と向き合うことは、したくなくなるわけです。ジョン・ストットの言う通りです。

もう一人 20 世紀を代表する偉大なクリスチャンで 20 世紀最大の説教者、講解説教の名手と呼ばれている D・M・ロイドジョーンズという人の言葉も紹介します。

**「人に決断を要請する明らかな聖書的真理ほど、人間の気分を害するものは無いと言ってよい。」**

もし、この 10 年に及ぶ金曜日の午後の学びにおいて、気分を害されたことが無いという人があるならば、その人はどうかしています。何かおかしいと思います。どこか麻痺していると思います。多分、皆さんは例外なく気分を害されたと思います。それでも続けて来れたのは、神のあわれみです。きついことを言われた、厳しいことを言われた、嫌なことを言われた、痛いところを突かれた、ぐさぐさと。もう散々、叩かれ、干されて、責められて、戒められて、惨めな思いにさせられて、ぼろぼろにされて、それでもあなたは続けて来れた。これは聖霊の働きです。人間的に言えば、肉的な観点から言えば、ここでの時間はあなたの気分を害するだけの時間です。このためにわざわざ時間を割いて、ガソリン代を払って、疲れて

いるのに体力を振り絞って、ここに来るということは、何のメリットも無いはずで。

でも、自分の気分を害されてでも、ここに来たい、来なければいけない、それは聖霊の働きであって、あなたの意思や感情や努力でやって来れたものではないということです。聖書の真理を学ぶということは、こういうことだということも忘れてはなりません。耳障りの良いことばかり聞ける、幸せな気分になれる、いつも慰められて励まさせて、ハッピーな気分にしてもらえる。それが学びだと思ったら大間違いです。そのような満たされる気持ち、確かに傷が癒されたり、本当に神の恵みが驚くべきものでそれに感動し、圧倒し、感謝して、喜びをもってウキウキ気分ですらあると思います。でもそういう時ばかりでは無いと思います。本当に気分を害された、もう嫌なことばかり言われた、本当は認めたくない、できたらそこは直視したくない、そのような箇所をすげずけと。気分を害される、そういったことの方がむしろ多いと思って頂きたいです。それが当たり前だと思って頂きたいと思います。おそらく、今私が話していることは十分皆さんに伝わっていると思います。そうでなければ、続けて来れなかったと思いますから。もう一人、今度は日本の牧師で榎本保郎という人、三浦綾子さんもこの人を尊敬していて、「ちいろば先生」という自伝小説も書いてます。日本基督教団の牧師です。榎本保郎の言葉で

**「私たちが一旦聖書を『神の言葉』として認めたら、主従が逆転し、私たちが『神の言葉』に従うしかない。私たちが御言葉を切り刻むのではなく、私たちが御言葉によって切り刻まれるべきなのだ。」**

日本基督教団の牧師として素晴らしい言葉だと思います。聖書は神の言葉として信じていない、神の靈感を信じていない日本基督教団の牧師として、立派な言葉だと思います。少なくとも榎本保郎という牧師は、聖書は神の言葉であると確信していた稀有な牧師の一人だと思います。私たちが一旦聖書を神の言葉として認めたらどうなるかということ、主従関係が逆転すると。今までは私たちが主人だったわけです。でも、この聖書によって、私たちがしもべになって、神が主人になるわけです。神の言葉とは神ご自身のことです。この神の言葉に従うしかないという主従関係です。「従うかどうかは、私が判断します」、ではないのです。もう従うしかないのです。ノー・チョイスです。ノー・オプションです。「私たちが御言葉を切り刻む、都合の良いところだけとって、都合の悪いところは切り捨てる」、ではなくて、神の言葉である聖書が私たちが切り刻むのです。聖書は、『神の言葉は、両刃のつるぎよりも鋭い』とヘブル 4:12 に書いてあります。

**神のことばは生きていて、力があり、両刃の剣よりも鋭く、たましいと霊、関節と骨髄の分かれ目さえも刺し通し、心のいろいろな考えやはかりごとを判別することができます。(ヘブル 4:12)**

このことを皆さんはバイブルスタディーで体験してきたと思います。神の言葉は、本当に生きている、本当に力がある。生きているから今も働くわけです。私たちが出来ないことも、御言葉の力によって成し遂げられたりするわけです。どうしても出来なかったこと、変えられなかったこと、やめられなかったこと、分からなかったこと、御言葉がすべてやってくれるわけです。魂と霊とか心のいろいろな考えやはかりごととも御言葉が判別してくれます。カウンセリングは必要ないのです。神の言葉がカウンセリングしてくれるからです。どうしたらいいか分からない、自己分析とか精神分析とか必要ありません。御言葉がすべて分析してくれます。聖書はすべて神の靈感によって書かれています。ですから教えと戒め、そして矯正と義の訓練とのために有益だと先ほど II テモテ 3:16 で読んだばかりです。この有益なものを私たちは手にしているわけです。いつでもどこでもこの聖書の言葉が、私たちがカウンセリングしてくれるわけです。アポイントもいりませんし、もちろん料金もかかりません。御言葉が私たちが切り刻んでくれます。必要



ないところをカットしてくれます。有害な部分、悪性腫瘍の部分、全身に転移・蔓延しないように、御言葉が切り刻んでくれるわけです。メスのようになって。有り難いですね。

また御言葉というのは、私を洗い清めるものだというようにも教えられています。エペソ 5:26~27 に

『<sup>26</sup> キリストがそうされたのは、みことばにより、水の洗いをもって、教会をきよめて聖なるものとするためであり、<sup>27</sup> ご自身で、しみや、しわや、そのようなものの何一つない、聖く傷のないものとなった栄光の教会を、ご自分の前に立たせるためです。』(エペソ 5:26-27)

悪いところを切り取ってだけでなく、また汚れたところを清めるということもします。だから私たちは、学びに来るのです。ここに来て、裸にされる思いです。レントゲンや CT スキャンや MRI を受けるようなものです。すべて明らかになります。先ほど読んだヘブル 4:13 にも「神の前にはすべて裸である」と書いてあります。

造られたもので、神の前で隠れおおせるものは何一つなく、神の目には、すべてが裸であり、さらけ出されています。私たちはこの神に対して弁明をするのです。(ヘブル 4:13)

御言葉を前にしたら、私たちは何の言い訳もできません。そのうえで御言葉の取り扱いを素直に受けるならば、手術台の上に乗ってまな板の上の鯉ようになるならば、御言葉は私たちを切り刻んで、そして清めて、健全なものに、本来あるべき姿に、神の望むものに、変えてくれる働きをします。御言葉には命があります。力があります。これにゆだねることができるならば、この御言葉を固く信じて、この御言葉に従うならば、必ず神はそのように私の内に働いて下さいます。私たちの内に働くだけでなく、今度は私たちを通して働いて下さいます。

I テサロニケ 2:13 を開いていただきたいと思います。

こういうわけで、私たちとしてもまた、絶えず神に感謝しています。あなたがたは、私たちから神の使信のことばを受けたとき、それを人間のことばとしてではなく、事実どおりに神のことばとして受け入れてくれたからです。この神のことばは、信じているあなたがたのうちに働いているのです。

(I テサロニケ 2:13)

これをそっくりこのスタディーにも当てはめたいと思います。私は絶えず神に感謝しています。なぜならば、皆さんは、私から受けた神の指針の言葉を受けた時、それを人間の言葉、私の個人の言葉、私の個人の教え、としてではなく事実通りに神のことばとして受け入れてくれたからです。この神のことばは信じている皆さんのうちに働いています。ここでの学びを、ただの聖書講義・釈義というふうにつまみ食いしないで、神のことばとして、字義（文字の意味）通り捉えて下さって、そのように信じる。そうするとどのようになるかという、書かれている通りの働きがあなたの内になされるといっているわけです。信じている者のうちに、働きます。いくら学んでも、信じていなければ、何の働きも、何の作用も、何の変化も、何の成長もない、ということです。信じなければ、意味がありません。信じているあなたの内に、神は働いて下さいます。

神から出た者は、神のことばに聞き従います。ですから、あなたがたが聞き従わないのは、あなたがたが神から出た者でないからです。」(ヨハネ 8:47)

神から出た者とは、勿論クリスチャンのことです。クリスチャンは「神のことば」に聞き従います。でも、「神の言葉」に聞き従わないならば、その人はもはやクリスチャンではないと、イエスがはっきりそう言われているのです。この言葉も厳粛に受け止めて頂きたいと思います。クリスチャンとは、神のことばに聞き従う者です。そうでなければ、その人はクリスチャンを名乗ってはいけないということです。これがクリスチャンであることの特徴です。クリスチャンとはどういう人か。それは、聖書に従って生きている人です、と定義されるわけです。聖書に従って生きていないような人は、たとえ信仰告白をして、水のバプテスマを受けて、教会員となっていたとしても、名ばかりのクリスチャンであって、その人はイエスの言葉からすると「神から出ていない」とされるわけです。問答無用です。あなたが神のことばに従わなければ、あなたはクリスチャンではないと。痛いですね。

「人に決断を要請する明らかな聖書的真理ほど、人間の気分を害するものは無いと言ってよい。」

と、ロイドジョーンズが言った通りです。クリスチャンではないなんて言われたら、ショックですね。しかし、そういうものです。それが聖書の真理です。

そのように聞いて、「ただ気分を害して、また責められて、また惨めな気分させられた」で、終わらないで下さい。そこから転じて、「私は、真摯にそれを受け止めます、厳粛に受け取ります、言われている通りです」、開き直すのではなくへりくだって、認めた上で、悔い改めることをしていただきたいと思います。「今から、今日から私は神の言葉に聞き従う者になります、本物のクリスチャンになります」と、決断して下さい。「人に決断を要請する明らかな聖書的真理」というふうにロイドジョーンズは言いましたが、聖書の真理とは、決断を要請するものなのです。「いつか従います、いつか決断します」で、終わってはいけないのです。ここで決断しなければいけない。帰ってからでなくて、明日からでなくて、来週とか、来年とか、でなくて、真理を聞いたら、即、決断するということです。即、従うということ。時間差を置かずです。何もかもすべて、即、実行できるわけではないと思います。でも、少なくとも、決断することは、できると思います。「信じます、従います」と、こういう決断はすぐできると思います。迷っているならば、何か問題であるということ。何かおかしいということ。勿論それも聖霊が明らかにしてくれることです。聖書の言葉が、あなたの心のいろいろなはかりごとを、判別してくれます。「何かおかしいのか、何が違っているのか」、聖書はあなたに過ちを認めさせることもさせるわけです。

そして、これも所信ということで、毎回聖書を開く際に、ディボーションの時に、あるいはバイブルスタディーの前に、ここに来る前に、是非していただきたいことがあります。それは、祈るということです。バイブルスタディーの祈りとして、皆さんに伝えた聖句があります。それは、**詩篇 119:18**の言葉です。

私の目を開いてください。私が、あなたのみおしえのうちにある奇しいことに目を留めるようにしてください。(詩篇 119:18)

これは、祈りです。バイブルスタディーのための祈りとして、皆さんには何度となく紹介させて頂いている聖句です。シンプルな祈りですけれども、祈りなくして御言葉の真理に目を留めることは出来ないということです。なぜならば、これは神の言葉だからです。人間の言葉ではないからです。人間の言葉だったら、祈る必要はありません。いくらでも自分の頭で、知性で、理解して処理出来るものです。でも神の言葉は、人間の知性だけでは理解できないわけです。ですから、祈りが必要です。神様が啓示して下さらなければ、神様が私たちの心の内に働いて下さらなければ、私たちはこの神の言葉を正しく理解すること

は出来ないのです。これは人智をはるかに超えているものだからです。祈りなくしては、聖書をまともに読むことが出来ないと思って下さい。ましてはバイブルスタディー、いくら学んでもちっとも身に着かない、それはあなたの祈りが、もしかしたら足りてないかもしれません。

テアテラ市の紫布の商人で、神を敬う、ルデヤという女が聞いていたが、主は彼女の心を開いて、パウロの語る事に心を留めるようにされた。(使徒の働き 16 : 14)

素晴らしい箇所です。主は彼女の心を開いて、パウロの語る事に心を留めるようにされた。これは主の働きです。ですから、私達も祈るべきです。私の目を開いて下さい。私が、あなたのみおしえのうちにある奇しいことに目を留めるようにしてください。どうか私の心を開いて、牧師の言うことに心が留まるようにしてくださいと。右から左に、記憶のかなたに行ってしまうないように、人ごとのように流さないように、自分のこととして、我がこととしてしっかり心に留まるように、「ここにいない人ためのメッセージ」なんて思わないように、「うちの夫のためにピッタリのメッセージ」なんて思わないように。そのように私達は祈りをもって臨むべきです。それは、聖書を書かれた聖霊の働きであります。

しかし、その方、すなわち真理の御霊が来ると、あなたがたをすべての真理に導き入れます。御霊は自分から語るのではなく、聞くままを話し、また、やがて起ころうとしていることをあなたがたに示すからです。(ヨハネ 16 : 13)

助け主である聖霊は、真理の御霊と呼ばれて、すべての真理に私達を導き入れて下さいます。この聖霊の働きを期待して、祈り求めていく必要があります。今の箇所だけでなく、ヨハネ 14 章にも、また 16 章のもっと前の方から、ずっと聖霊の働きについてイエスは詳しく教えて下さっていますから、是非聖霊の素晴らしい働きを知って頂いて、その働きにゆだねて頂きたいと思います。あなたが出来ないことを、聖霊がして下さいます。I コリント 2 : 10~14 も参照したいと思います。

『<sup>10</sup> 神はこれを、御霊によって私たちに啓示されたのです。御霊はすべてのことを探り、神の深みにまで及ばれるからです。<sup>11</sup> いったい、人の心のことは、その人のうちにある霊のほかに、だれが知っているでしょう。同じように、神のみこころのことは、神の御霊のほかにだれも知りません。<sup>12</sup> ところで、私達たちは、この世の霊を受けたのではなく、神の御霊を受けました。それは、恵みによって神から私たちに賜ったものを、私たちが知るためです。<sup>13</sup> この賜物について話すには、人の知恵に教えられたことばを用いず、御霊に教えられたことばを用います。その御霊のことばをもって御霊のことを解くのです。<sup>14</sup> 生まれながらの人間は、神の御霊に属することを受け入れません。それらは彼には愚かなことだからです。また、それを悟ることができません。なぜなら、御霊のことは御霊によってわきまえるものだからです。』

今読んだところを端的に言いますと、聖霊の靈感によって書かれた聖書の言葉は、聖霊なくしては理解出来ないということです。ですから、聖霊を受けていない、聖霊が内に住んでいないノンクリスチャンは、いくら聖書を読んでも悟ることが出来ない、理解できない、とっているわけです。では、ノンクリスチャンは聖書を読んでもいけないのでしょうかと言ったら、そうではありません。そうではなくて、聖霊はすべての人たちと一緒にいて下さいます。クリスチャン・ノンクリスチャンにかかわらず聖霊はすべての人と共にいてくださって、その聖霊が働いて、ヨハネ 16 : 8 によると、その方が来ると(聖霊が来ると)、罪について、義について、さばきについて、世にその誤りを認めさせます。(ヨハネ 16 : 8)

罪についてというのは、彼らがわたしを信じないからです。(ヨハネ 16 : 9)

イエス・キリストを信じない罪、これが最大の罪です。これを示すのは聖霊です。ですから、聖霊がノンクリスチャンにも働いて、聖書の言葉を用いて、イエスを信じないことが最大の罪であるということを示してくれるわけです。でも、それ以上の理解は得られません。先ずイエスを信じなければ、聖書をクリスチャンのようにもっと親密に深いレベルで学ぶということは出来ないわけです。ですから、私たちはもう既にイエス・キリストを信じる者として聖霊を内に頂いている者です。聖霊が内住しているわけです。その聖霊が私たちに光を当てて、聖霊の照明によって、私たちは正しく、聖霊の書かれた聖書を理解できるわけです。これは、クリスチャンの特権です。だからクリスチャンが聖書を読まないということは、全くばかげた話で、愚かしい話で、もったいない話で、特権を無駄にしているということです。ノンクリスチャンはいくら読んでも理解できないのです。クリスチャンだけが聖書を理解できるのです。これは素晴らしい恵みです。だからますます熱心に聖書を読むべきです。学ぶべきです。

次にエペソ 4 : 11 を参照します。そうはいえ、いくら一人で聖書を読んでいても、理解できない箇所があります。「私は、それでもクリスチャンなのでしょうか。クリスチャンならば聖霊が働いて、すべての真理に導き入れて頂けるのに、どうして私はいくら聖書を読んでも理解できないのですか。」心配いりません。エペソ 4 : 11 にこう書いてあります。

こうして、キリストご自身が、ある人を使徒、ある人を預言者、ある人を伝道者、ある人を牧師また教師として、お立てになったのです。(エペソ 4 : 11)

キリストが私を牧師また教師として立てて下さいました。その牧師には聖霊の賜物が与えられます。特にその聖霊の賜物で必要なのは教える力です。これは、努力の賜物ではありません。賜物というのは、天からの、天与のギフトです。賜物のギリシャ語は「カリスマタ」といいます。「カリスマタ」とは「カリスマ」からきています。「カリスマ」というのは、よく「カリスマ美容師」とか使いますが、聖書的には「カリス」(恵み)という言葉からきています。つまり賜物というのは「恵み」です。「恵み」は「努力」とは正反対の言葉です。「恵み」の反対語は「行い」です。分不相応な者に与えられる過分な親切、それが恵みです。その恵み「カリス」が、目に見える形で現れる、それが「カリスマタ」(複数形)です。「カリスマ」の複数形が「カリスマタ」、その数ある「カリスマタ」の中の一つの「カリスマ」(賜物)が、教えるというもので、それが牧師に与えられるわけです。だから私は聖霊によって、聖霊の力によって皆さんにこの聖書を説いて、聞かせて、教えることが出来るわけです。皆さんの理解を助けることが出来るのは、私に聖霊の賜物が与えられているからです。私が特別に能力があるからではありません。私が特別に高い学歴を持っているからではありません。これは聖霊が与えて下さったものです。私はただの道具です。実質、聖霊が私を通して皆さんに教えておられるわけですから、同じことなのです。皆さんが一人ひとり聖書を読んで、聖霊が教えて下さると同じように、聖霊はある時は牧師を使ってあなたに教えてくれる、ただそれだけのことです。教えて下さるのは聖霊です。変わりありません。一人で読んで学ぶことも出来ますし、一人で読んで学べない場合は、その教える能力を賜物として受けた牧師や聖書教師という神の器を通して学ぶことが出来るわけです。ですから皆さんは大いに活用すべきです。聖書は理解できるように与えられているわけです。そのための手段も与えられているわけです。「私は一人で聖書を読んですから、それで十分です、教会なんか行かなくていいです、牧師なんか認めません」、気を付けて頂きたいと思います。キリストが立てた牧師・教師、それを認めないということは、キリストを認めないということと等しいわけです。「教会に行かない」それもキリストに反逆する行為です。なぜならば、「教会」は、キリス

トが立てたものだからです。『わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てます。ハデスの門もそれには打ち勝てません。』(マタイ 16:18) とイエスは、おっしゃいましたが、教会のかしらはイエス・キリストであります。むろんキリストが立てていない牧師も存在します。賜物がない牧師、あるいはキリストがかしらでない、人間がかしらとなっている、世俗的な教会もあります。そういったところを私は肯定しているわけではありません。そういった本来牧師としてふさわしくない者が運営する教会を是認しているわけではありません。そうではなくて、本当にキリストが立てて、キリストが召して、キリストが聖霊の賜物を与えた牧師ならば、必ずその人を通してあなたは聖書を正しく学ぶことが出来るということです。そうしたものをフル活用して聖書を学ぶ必要がある、努め励む必要があるということです。それを使わないのは、もったいないことです。

そして、そろそろまとめていきたいと思えます。金曜日の学びの原点。それは一人の人から始まりました。でもそれがどんどんと広がって、そこで聞いたことを他の人にも伝えたり、分かち合ったり、シェアする中で、「私も聞いてみたい、学んでみたい、私も参加してみたい」そうやってどんどん口コミで広がったわけです。そのことを皆さんにも続けて頂きたいと思えます。このグループを拡大していくことが、もちろん目的ではありません。そうではなくて、聖書の学びの目的は、すべての良い働きのために、ふさわしい十分に整えられた者となるため。そのために私たちは、今こうやって時間を主から頂いているわけです。そして、バイブルスタディー全般において言えることですが、決して忘れてはいけないことは、御言葉をどうして私たちは読むのか、学ぶのか。ただ単に奉仕をするためではないことを、忘れてはいけません。それは、副産物とっていいと思えます。それが主たる目的ではないということです。それは結果として付いてくるというものです。主たる目的は、奉仕の前に、神を知ることです。キリストを知ることです。神と個人的な関係を持って深い豊かな親密な交わりを持つこと、それが真っ先に問われることです。それを今日私は冒頭で皆さんにお伝えしました。幼い頃から聖書に親しむことの大切さ、救われたばかりの人が真っ先に聖書に慣れ親しむことの必要性、重要性、それを最初に述べました。それを乗り越えていきなり奉仕にはならないと。いきなり当番で役をまわされることはないと言って、冒頭にこのことを皆さんに伝えました。先ずはイエスを知るためです。神を知るためです。エレミヤ 9:23,24 を開いて下さい。

主はこう仰せられる。「知恵ある者は自分の知恵を誇るな。つわものは自分の強さを誇るな。富む者は自分の富を誇るな。

誇る者は、ただ、これを誇れ。悟りを得て、わたしを知っていることを。わたしは主であって、地に恵みと公義と正義を行う者であり、わたしがこれらのことを喜ぶからだ。――主の御告げ――

(エレミヤ 9:23,24)

わたしは誠実を喜ぶが、いけにえは喜ばない。全焼のいけにえより、むしろ神を知ることを喜ぶ。

(ホセア 6:6)

どんな犠牲よりも、どんな奉げ物よりも、どんな奉仕よりも、どんな献金よりも、むしろ神を知ることが何よりも神は喜ぶとおっしゃっています。今私たちがこうして学びに来ているのは、神様に最も喜ばれることをしているということ、毎回毎回心に刻み付けて下さい、焼き付けて下さい。自分を喜ばせるためにここに来ているのではなくて、神を喜ばせるためにここに来ているわけです。どうやったら神に喜ばれるかと言ったら、聖書を通して、神を個人的に知ることです。勿論この「知る」という言葉は皆さんご存知のとおりヘブル語の”yada”(ヤダー)という言葉です。夫が妻を知るという時に使う言葉です。性

的に知る、夫婦関係を持つという、そういう親密なレベルで神を知る、この目的によって聖書を日々開くならば、金曜日の午後に学びに来るならば、神はこのことを、あなたのことを最も喜んでくださる、喜んでおられるということです。これを忘れて、別の目的で聖書を開こうとすれば、あなたは神に喜ばれるような取り組みをしていないということです。問題の解決を求めるために聖書を開く、それがダメとは言いません。でもその前に、神を知るために聖書を開く必要があるということです。その中で、具体的な問題の解決や「どうすべきか」という指針も与えられると思います。確かに知恵は与えられます。でも、その知恵というのは、イエス・キリストご自身だ、ということをお忘れはいけません。イエス・キリストこそ神の知恵です。そこで、**ルカ 24 : 27** をお読みします。

それから、イエスは、モーセおよびすべての預言者から始めて、聖書全体の中で、ご自分について書いてある事ながらを彼らに説き明かされた。 (**ルカ 24 : 27**)

聖書は、キリストについて書かれた本です。旧約聖書はすべてキリスト・イエスについて書かれているということです。それ以外の目的では書かれていないということです。同じく**ルカ 24 : 44** もお読みします。

さて、そこでイエスは言われた。「わたしがまだあなたがたといっしょにいたころ、あなたがたに話したことはこうです。わたしについてモーセの律法と預言者と詩篇とに書いてあることは、必ず全部成就することでした。」 (**ルカ 24 : 44**)

聖書はすべてイエス・キリストについて書いてある、ということを感じて聖書に取り組むならば、**45 節**を見て下さい。

そこで、イエスは、聖書を悟らせるために彼らの心を開いて、 (**ルカ 24 : 45**)

とあります。もし私たちがイエス・キリストを知る、という一点で聖書を開くならば、バイブルスタディーに臨むならば、必ずイエスは聖書を悟らせるための働きをして下さいます。聖書が理解できるように、心を開いて下さるのです。これ以外の目的でいくら頑張って自分の知性をフル回転して読もうとしても、これ以外の目的で「答えはないだろうか、自分の悩みや、悲しみや、問題や、痛み、苦しみに対する解決はないだろうか」、「どうしたらいいかわからない。その指針となるような言葉はないだろうか。」ということを読もうとしているならば、いつまで経っても悟ることが出来ないかもしれません。でも、それらすべて置いて、まずは「イエス・キリストを知りたい、主はどんな方でしょうか、主は何を私にお望みでしょうか、主はどのようにお考えになっているのでしょうか、どう感じておられるのでしょうか、イエスならどうされるのでしょうか」そういう思いで聖書を開くならば、必ずイエスはあなたの心を開いて下さいます。今まで分からなかったことが、驚くほど分かるようになります。もう真っ暗闇だった、理解が暗かったところに、光が当てられます。ハッキリ見えるようになります。ハッキリ聞こえるようになります。ハッキリ理解できるようになります。

また、**ヨハネ 5 : 39~47**

『<sup>39</sup>あなたがたは、聖書の中に永遠のいのちがあると思うので、聖書を調べています。(言い換えれば聖書の中に救いがある、解決がある、助けがある、と思うので、聖書を調べています。) その聖書が、わたしについて (イエス・キリストについて) 証言しているのです。<sup>40</sup>それなのに、あなたがたは、いのちを得る

ためにわたしのもとに来ようとはしません。<sup>41</sup> わたしは人からの榮譽は受けません。<sup>42</sup> ただ、わたしはあなたがたを知っています。あなたがたのうちには、神の愛がありません。

神の愛がない。愛がなければどんな知識や奥義に精通していても、何の値打もない、何の役にも立たない、ということが**I コリント 13 章**のところで読み上げました。神の愛がない。むしろ自己愛で一杯です。自分を愛するその愛、自分が可愛い、自分がかawaiiそう。だから聖書を読もうとします。全部自分のために。そのような聖書の読み方では、いつまでたっても前に進まない、字面しか追えない。むしろここで言われている「あなたがた」つまり宗教家たち、パリサイ人、律法学者たちのように頭でっかちで、神への愛を持ち合わせないような、冷たい、人間に成り下がってしまうということです。

<sup>43</sup> わたしはわたしの父の名によって来ましたが、あなたがたはわたしを受け入れません。ほかの人がその人自身の名において来れば、あなたがたはその人を受け入れるのです。<sup>44</sup> 互いの榮譽は受けても、唯一の神からの榮譽を求めないあなたがたは、どうして信じることが出来ますか。<sup>45</sup> わたしが、父の前にあなたがたを訴えようとしていると思っはなりません。あなたがたを訴える者は、あなたがたが望みをおいているモーセです。<sup>46</sup> もしあなたがたがモーセを信じているのなら、わたしを信じたはずです。モーセが書いたのはわたしのことだからです。<sup>47</sup> しかし、あなたがたがモーセの書を信じないのであれば、どうしてわたしのことばを信じるでしょう。」(ヨハネ 5 : 39~47)

聖書はすべてイエス・キリストについて書かれた本であります。これは、イエスご自身が言われたことですが、新約聖書の大半を書いたパウロもこう言っています。

そこで、彼らは日を定めて、さらに大ぜいでパウロの宿にやって来た。彼は朝から晩まで語り続けた。神の国のことをあかしし、また、モーセの律法と預言者たちの書によって、イエスのことについて彼らを説得しようとした。(使徒 28 : 23)

パウロが行ったバイブルスタディー。それは旧約聖書を用いたもので、まだ新約聖書は当然存在してなかったわけです、完成してなかったわけです。ですからパウロは旧約聖書 39 巻を使ってそこからイエス・キリストを証ししたわけです。それが聖書的なバイブルスタディーです。どの聖書箇所からでもイエス・キリストを証しする。それ以外の目的で教えてしまうならば、私的解釈、曲解といっても差し支えないと思います。

聞く側も問題があります。イエス・キリストを知りたい、もっと知りたい、そういう動機で、目的で、臨まないならば、ほとんど意味のない時間を過ごすことになります。逆に弊害があります。なぜなら知識は人を高ぶらせるからです。下手に学んで、高ぶるわけです。そして、家に帰って、夫からなじられるわけです。知ったかぶりして、父親から、母親からそう言われるわけです。「聖書をそんなに学んでいるのに、何も変わらないじゃないか」、と皮肉めいたことを言われるわけです。子どもたちからもそう言われるわけです。

4 世紀のラテン教父でヒエロニムスという人がいます。そのヒエロニムスはこう言いました。

「聖書を知らないことは、キリストを知らないことである。」

「別に私は聖書なんか読みませんが、イエス・キリストを信じています。」というようなことをよく聞き

ます。いつもいぶかしく思います。聖書を知らないのに、キリストを知っているとは言えないと。本当にイエスを知っているならば、その人は聖書を知っているはずであります。

また 16 世紀の宗教改革者、ジャン・カルバンは、こう言っています。

「我々は聖書を読むとき、その中にキリストを見出そう、という意図をもって読まなければならない」

そうやってカルバンは読んで、宗教改革が起こったのであります。死んだような状態、霊的な墮落、そこから劇的な変革・リバイバルをもたらしたいと思うならば、宗教改革者たちがしたことをして下さい。聖書を読むとき、その中にキリストを見出そう、という意図をもって読むならば、あなたの人生にも宗教改革が起こります。聖書は私たちの知識を増やすためのものでなくて、私たちの生涯を変えるものであります。

また 18 世紀のイギリスのリバイバリスト、ジョージ・ホイットフィールドはこう言っています。

「イエス・キリストは、聖書の中に隠されている宝物です。ですから聖書は、イエス・キリストを見つけるために読まなければなりません」

まさに宝探しです。これほどエキサイティングなことはありません。これほどワクワクすることはないです。「読まなきゃいけない」ではなくて、「もう読みたくて仕方がないのです」。キリストという宝を発見できる。そういう読み方を皆さんは出来てきているのでしょうか。

そしてもう一人、日本を代表するクリスチャンで、明治の人です。内村鑑三。私たちはキリストを知ろうと願って聖書を学ぶのである、と言いましたが、もう一つ彼の引用を皆さんにお分かちしたいと思いません。

「聖書研究の目的は（バイブルスタディーの目的は）イエス・キリストを知らんがためである。研究のための研究でない。イエスを知らんがためである。彼を知るは生命である。いかなる労苦をも惜しまず彼を知るべきである。そしてイエスを知るために聖書全部を知る必要がある。新約のみならず旧約をも知る必要がある。ノア、アブラハム、イサク、ヤコブ、ヨセフ、モーセを知る必要がある。すべての士師とすべての預言者を知る必要がある。大人物は一朝一夕にして知ることのできるものでない。一生涯の研究が必要である。それゆえに、早く聖書研究を始めよというのである。小児を日曜学校に送り、イエス研究の準備として聖書研究を始めしめよというのである。人生をして意義あらしむるものはイエスを知ることである。彼を知ると知らざるとの差は、生と死との差である。聖書を生命の書と称するは、神が人に賜いし生命の因（もと）たる、そのひとり子イエスを紹介するからである。古書研究のための聖書研究ではない。人らしく今生きたためのこの研究である。ゆえに、教うる者も学ぶ者も、燃ゆる熱心をもってこれに当たらねばならぬ。冷静なる聖書研究はあり得ない。そは、「冷静なる生命」は蛇の生命であるが、人の生命ではないからである。」（内村鑑三）

素晴らしい言葉です。その通りです。聖書研究の目的は、イエス・キリストを知らんがため、そのためには熱心にならざるを得ない、ということです。熱心だけで知識が無いのは良くないですけども、熱心にこの知識を追い求めるということです。それがMGFにおけるバイブルスタディーの究極の目的であります。このことを実行に移すならば、私たちは気がついて見たら、神の働き人、神に遣わされて神の御心を行い、神の栄光を最高に素晴らしくあらわすことの出来たお方に似てくるのであります。それが、バ



イブスタディーが私たちにもたらす益というものです。それが私たちの目標となっていきます。

最後に**使徒 17 : 11,12** を読んでこの時間を閉じさせて頂きたいと思います。これは、口酸っぱく皆さんには、事あるたびに、イブスタディーの中でも確認として読み上げている箇所です。

『<sup>11</sup> このユダヤ人は、テサロニケにいる者たちよりも良い人たちで、非常に熱心にみことばを聞き、はたしてそのとおりかどうかと毎日聖書を調べた。<sup>12</sup> そのため、彼らのうちの多くの者が信仰に入った。その中にはギリシヤの貴婦人や男子も少なくなかった。』 (使徒 17 : 11,12)

ベレヤのクリスチャンたちは、非常に熱心に御言葉に聞き入っていたわけです。でも、それだけではとどまりませんでした。非常に熱心に御言葉を聞くだけでは、良い人とは言えないのであります。本当に聖書的に良い人というのは、はたしてそのとおりかどうかと毎日聖書を調べる人のことです。パウロのメッセージを聞いて、彼らは旧約聖書から吟味したのです。新約聖書の大半を書いた偉大な使徒パウロの説教をも、ベレヤの人たちは旧約聖書を使って、鵜呑みにしないで、一つ一つ確かめて、識別して、吟味したのであります。これが皆さん全員に問われていることです。求められていることです。MGFの人たちは良い人たちです、と。なぜならば非常に熱心に御言葉を聞き、はたしてそのとおりかどうかと毎日聖書を調べているから、と言われるものでなければいけないと。そういうふうには伝えてきました。私の言うことをすべて鵜呑みにしないで下さい。勿論、疑ってかかるとか、信用しないと、そういう意味ではありません。そうではなくて、全部自分で聖書を開いて確かめる、そうしなければ絶対に成長は望めないということです。神の目に良い人にはなれないといっているわけです、不十分だと言っているわけです。今後もこのことを皆さんにはしっかりと押さえて頂いて、「これが原点である、これがベースであって、これが所信であって」、常にここに立ち返って、忘れかけてしまう時もあると思います。忘れてしまって、すっかり目的外の聖書の見方や学び方に陥ってしまうこともあると思います。知識偏重になってしまって、全然実行が伴わない、愛に欠ける、そのような間違った状態に陥ることもあると思います。金曜の午後の学び 10 年間を振り返ってみて、それぞれ主が問うておられること、チャレンジしておられることを聞いていただいて、応えて頂きたいと思います。